

ホセにハグを

「**ホセ**は**勇気**を出さなければいけないと思いました。」



キャロライナ・マルドナード
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)

このお話はボリビアでの出来事です。

「**な**ーんだ！お前は**何も**知らないんだな！」ファブリシオはホセを指さして笑いました。

アダムは顔をしかめました。ホセは先生に質問したばかりでした。そのことをからかうなんて、ファブリシオは意地悪です。

「ファブリシオ、もうやめなさい」と、先生は言いました。

アダムはホセを見ました。ホセは、ファブリシオの言葉が聞こえなかったかのように、ノートをじっと見詰めていました。

ホセは転校してきたばかりで、最初、だれもホセに話しかけませんでした。それから、何人かの子供たち

がホセをからかい始めました。いろいろなあだ名でよんではからかうのです。アダムはホセを助けなければいけないと思いました。が、何と言えよいか分かりませんでした。

それに、ホセは平気そうに見えました。からかわれても気にしていないように見えました。

アダムはまた本を読み始めました。間もなく大事な算数のテストがあるので、集中しなければいけません。

テストの当日、アダムは一生懸命がんばりましたが、むずかしいテストでした！アダムは成績のことが心配になりました。不合格だったらどうしよう？

翌日、先生がたくさん紙を持って教室の前に立ちました。「テストの点数が出ました」と、先生は言いました。「もっとがんばらないといけない人が多かったのですが、とてもいい点数の人もいました。」

先生は、生徒一人一人の成績を声に出して読み始めました。かなり低い点数の人がほとんどでした。アダムは不安な気持ちで自分の名前がよばれるのを待ちました。

「アダム」と、先生は言いました。「80点。」信じられませんでした。合格したのです！アダムはにっこりと笑いました。

それから、先生はホセの成績を読み上げました。「100点。」先生は大きな声ではっきりと言いました。「満点です。」

ファブリシオは立ち上がり、「そんなはずない！」とさげました。「ホセはカンニングをしたんだ！」

「そうだ！」と別の男の子が言いました。「あいつは何も分かっ

てないんだから、だれかの答えを写したんだ。」

ほかの生徒も口々にそう言いました。カンニングはしていない、とホセは言いましたが、だれも耳をかたむけようとしません。先生が静かにするように言いましたが、だれも先生の言うことを聞きません。

「するだ！」とだれかがさげびました。

「うそつき！」とほかのだれかが言いました。

アダムのむねの鼓動が速くなります。どうすればよいのか分かりませんでした。アダムはホセを見ました。ホセは大丈夫だろうか。ホセはいつも落ち着いている子です。

ホセはいつものように自分のつくえをじっと見つめていました。ところが、ホセは泣き始めました。

ほかの子供たちはさげぶのをやめ、部屋は静まり返りました。アダムの耳に聞こえてくるのは、ホセがすすり泣く声だけでした。アダムは、今回はもうだまっているわけにはいかない、と思いました。勇気を出さなければいけません。せいいいが、ホセを助けなさい、とアダムに語りかけておられました。

アダムは立ち上がりました。ほかの子供たちは、ホセのところに歩いて行くアダムを見ていました。アダムにはまだ、何と言えよいか分かりませんでした。そこで、ただ身をかかめてホセをぎゅっとだきしめました。

「大丈夫だよ」と、ホセの背中をなでながらささやきました。「大丈夫だからね。」

間もなく、ほかの子供たちもやってきてホセをだきしめました。ファブリシオもやってきて、「ごめんね」と言いました。ほどなくして、クラスの全員がホセの周りに立って、「ごめんね」と言い、ホセを元気づけようしました。

「みんな、ホセのことが大好きだよ」とだれかが言いました。「君が一番算数が得意だね！」と別の人が言いました。

ホセはなみだをぬぐい、にっこりしました。アダムもにっこりとほほえみました。親切にするには勇気がいりましたが、そのかちはありました。●



イラスト：ジョー・ロニート